

「ソクラテスの辯明」から

世界史上の悲劇の一つとして、人類の永遠の教師の悲壮なる最期を描けるプラトンの「ソクラテスの弁明」(岩波文庫)を、四・五年の人々とともに読んだのは、去年初夏の朝であったが、私はここにその時のいきいきとした思い出を、本文の順序に記してみたいと思う。

一

「真実を語る者を大雄弁家」とすることに、「語ること」すなわち対話をその方法とし、真理探究をその目的とする哲人にして教育者たるソクラテスの面目がみられる。

二

ソクラテスに対する二種類の告発者の一つ、すなわち古くから多年にわたって彼に対して、全然虚構の風説を流布してきた弾劾者　その名もわからぬし、したがってこの法廷に呼び出しようもない　に對する彼の弁明は、「譬えば影と戦ふ」とく応答する者がない」のである。本来対話は生ける対者と生ける言葉とを予想す

る点に、著作や講演に比して、とくに現実の種々なる程度と個性とを相手とする教育の優れた方法たりうる所がある。言葉は「生ける魂あるもの」で、対者の如何に依じて「語るべく黙すべきを知り」「自己を支配する力がある」。しかし、かく対話は現実に対者を予想しながらも実はそれによって各々が、自己吟味、自己省察に帰るところにその真意義がある。「魂が思索するとは対話すること、すなわち魂が自らに問い答え、肯定し否定すること」にほかならぬ。そして「言葉そのものにしたがって、言われたことの反対を追求する」のは単なる論争のための論争的態度、すなわちソフィスト的態度であるが、真の対話的態度は「事柄の真理を追究する」ものでなければならぬ。現実を無視して、主義主張と云うが如き概括的、抽象的、鑄型に入れようしたり、あるいは、外から圧制的な変形を強いようとするのではない。さりとてまた「そんなことでは困るが」と、いたずらに傍觀的な態度をとるのでもなく、「あれは駄目だ、仕方がない、始末におえぬ」と放任することでもない。現実の流れを、岸の上から上品な批評をしたり、虫のいい勝手な要求を出したりすることは、およそまるつきり縁が遠いのである。現実の流れに飛び込んで、それと一つになって流

れながらその現実を生かしていく、内的必然的方向を探り出そうとする態度である。現実に要求を出すだけのことならば易々たる問題だ。現実を要求にまで引き上げることこそ難しい。したがって教育は対象となる現実に優劣上下の選択をおこなわぬ。おとなしい者は容れるが、横着者は容れぬでは初めから問題がないわけである。さて、ソクラテスはこの場合かの影の如き弾劾者に対して、「それが自分および法廷になみいる人々のためになる」、すなわち語る者、聴く者各々自己省察に資する限り、弁明を試みんとするのであつて、もしそれ、弁明のもたらす結果如何に至つては、事件をして神の御心のままに成り行かしめよ」。

三

ソクラテスは言う。かの自ら智者・賢者と称して、知識を人に教授するソフィスト達は、実に超人間的智恵の所有者であり、それに反して彼自身の所有するは、一種の人間の智恵であると。

彼は、どこまでも現実の大地に立つ人間たらんとする。人間的智恵！神託の話は始まる。大小の事柄において、自ら賢明でないことを充分に自覚しているソクラテスに對し、デルフォイの神託は告げる。「ソクラテスにまさる

賢者はなし」と。この奇怪なる神託を、事実によつて反駁せんと、彼は世間の多くの人々から賢者と仰がれ、なかならず彼等自身も、そう思い込んでいる知名の人々を歴訪し吟味する。ところが彼の期待はいずれも裏切られて、彼等が善についても、美についても何も知っておるまいと思われるのに、彼等は知らないでいてそれを知っていると信じており、これに反してソクラテス自身は、同様に知りもしないがまた知っていると自信しない。すなわち自ら知らざること知らずと信じているという点において、彼等よりは賢明であること発見したのである。

そこで神託の意味は「人間の中の最大の賢者とは、己れは智恵に關しては実に何の取柄もなき者であると自覚せる者である」ということになる。まこと眞実賢明なるはひとり神自身であり、人智の価値は、空無に等しいものである。この場合ソクラテスは、唯その一例としてその名が挙げられたにとどまり、およそ何人でも彼と自覚を等しくする限り、かかる意味において、神より「賢者」の名を許されうるものでなければならぬ。

四

かかる意味での「賢者」の内容は何であるか。いわゆる「無知！無知の自覚！」。

信の自証。信ずるものなき絶対信の体験。内に向つての信は、外に愛を現す。信ずるとは愛すること。愛するとは信ずること。愛は知を生む。愛なきところに知はない。知るとは愛すること。知と愛とを一つにして信無知の自覚の背後には、神の声が聴かれるのである。人間における最高の智慧。智慧の智慧。知識を無限に憧憬し追求する智慧。愛知。知識を無限に生み出さんとする智慧。愛と知との源泉。知識は教授される（ソフィスト）のでなく、知識は現実によつて愛し求められねばならぬ。真理は教えられるのでなく、現実を愛することによつて現実の中から発見されねばならぬ。信に立つ現実が、知を愛し、真理を探究する根本的態度が無知の自覚。現実自身の、この愛知求真の主観的理性的態度は、そのまま現実を動かして行く客観的教育態度。現実が自己に即しながら自己を超えて行くその方法が対話法であるならば、対話法は教育の方法であり、その主観的基礎は、教師および生徒の無知の自覚。両者はこの共通基礎の信の体験の上に立ち、対話法の理的自省を通して、これが客観的真理の世界に参与する。真に対話法は真

理への道の荊棘を切り開く利剣である。敵を斬ると同時に、我自身を斬る両刃の剣である。相互の信愛に基いて、教えられ合つて行くことによつてのみ教え合つて行く方法。したがつてそこには、この主観の自己主張も含まれず、この主観の傲慢も容れる余地なく、かえつてこれ全的自己否定、尽きることなき念にのみ自己慚愧、故に彼が他人との論議に勝つた時は、「勝利を得たという態度の代りに今や全く風刺をはなれた謙虚の態度があらわれている」と言われる所以である。ここに対話法はソフィスト的詭弁的の道具であることから救われて、真に教育の方法となる。焦燥と興奮との主観的独断の闇が端的に破れて、しみじみとした無限の心の落ちつきの中に、客観的真理の朝の陽の輝きはじめるのは、無知の自覚の日に於いてである。したがつてソフィストの如く巧妙に人を教授するの術を解しない」ソクラテスはそれ自身、永遠に信と愛と知とを統一する教育道の真ん中に立つのである。

五

徹底無知の自覚に立つて衷心真理の日の中に、我人間共に生きんと希う人。底なき底の深みに立つ者のみが仰

いで無限の空の高さを感得しうる。狭小な独断の有限の世界をその高さ、その深みにおいて無限にまで解放する人。彼はその極みにおいて神に直面する。無知の自覚の奥において、神よりの使命を、神自らの言葉（ダイモンの声）を通して親しく受けとる人。彼の地上における生は、ただ「神より定められたる持場」、換言すれば「愛知者として生き、自己ならびに他人を吟味すること」を忠実に実行せんためにほかならぬ。神の声を自らの内に聴く人でなければ、彼の理知的内省は単に自他を斬る殺人剣たるにとどまり、真個我、人を生かす活人剣たることは出来なかつたであらう。

神は一切を否定することによって一切を肯定する。否定の半面しか見えぬ、多数俗衆の嫉妬、誹謗、猜疑、憤激。「それはすでに多くの善人を滅して来た。思うにまた滅して行くであらう」。

ソクラテスが「その最後の者であろうというような心配は決して無用」である。これに対して彼が弁明を試るのは彼自身のためではなく、彼等が彼を処刑することによって、神より地上に与えられた使命を犯すやうなことになるためである。彼こそはまさに神からいはば「巨大なるが故に運動に鈍い軍馬（アテナイ市）に、これを

絶えず刺激して覚醒させるために、くつつけられた虫」である。この故に彼は「一日中到的処に誰かれを問わず、市民の一人一人を覚醒し、説服し、非難することを決してやめないものである」。そこに何の躊躇もなく何の気兼ね遠慮もない。情実、妥協を排して仮借なく、直に事柄の真実に徹せずにはおかぬ。

六

生死を超越しての使命の遵奉。神はその胸を開いてつねに彼の帰来を待たれている。すなわち、彼の幼年時代から絶えずことあるごとに、内心に聴かれて来た明瞭なダイモンの諫止の声は、この非常の際ともいうべき時にあたって全く沈黙を守っているということが、神の彼の態度を嘉（よみ）し給う証拠ではないか。流れの中にある者は水の音を聴かぬ。神の懐に入る者はもはや神の声をきかぬ。背後に不壊の永遠を負ふてしばらく眼前に壊はれ、くずれ行く有限の世界に向って獅子吼する齢七十の哲人の姿は、西山に春づく夕日の紅焰、天地を焼く懈あるにも似る。

七

人はここでダイモンの声が常に消極的諫止の声として聴かれ、積極的激励の声でないことに気づく。彼の精神的健康さにもなう肉体的感覺的欲望は、外に対して常に積極的自我主張の要求に燃える、しかも、この外に働きかけんとする自我建設の努力を抑止廻転し、かえってそれらを統一してしみじみと内に省みさせる消極的力こそは「ダイモンの声」である。単に良心の声というも足らぬ。それは外に対して絶えず自己を正義化し、理想化し、偶像化せんとする自我の虚しき積極的努力を、無限に破し、破し破し破し尽さずばやまぬ否定の力である。無信の信に基つかぬ愛は利己的であり、盲愛であり、溺愛である。それは真知をそこない物の理を破る。他を攻撃し他を動かさんとする半面には、自己防衛と自己弁護とに余念なき相対的自我を拉（無理に連れて行く）して、直ちに無尽の自己苛責の筈の下に置き、念々不断の慚愧を通して悲喜哀樂の現實の流れの中に入りながら、それを超え行かしまる宗教的力である。ソクラテスの無知の自覚の奥を採って、人は宗教の世界に導き入れられる。「現実」の教育は無知の自覚を出発点とする理智的内省の方法に待たねばならぬが、教育はまた無知の自覚を介してついに信の世界・宗教の世界にその故郷を見い出さ

ざるを得ぬ。

八

よく現実を超える故に、またよく現実の中に入るを得る。人生の帰趨、自己の運命を達観して雄々しくも現実の一路を肅々として歩む彼、青年であれ、老人であれ、貧富の差別なく、何人の質問にも応じて彼等の望む時に答えるのみで、未だかつて人に授業を約束したり、授けたりしたことのない彼は、實際何人の師にもなりはしなかつたのである。したがって彼の話を聴いた青年達が「世に益する人になろうとなるまいと、公正に言えば」、彼に「責任を負うわけではない」のである。教育は無知の自覚を出発点とする。しかも無知の自覚に立つ者は人の師たることを知らぬ。彼自ら真理の幼稚なる徒弟として人と語りあう者ではあるが、自ら師として人を教える者ではない。他の責任を持ちうる者は、まづ彼自身の責任を持ちえねばならぬ。無知の自覚は念々の慚愧をこそ生め、徹底して他の責任を口にするの任に堪えぬのである。よく責任に居らぬゆえに真によく責任を辞せぬ。彼こそは責任の転嫁、責任の解除、責任の逃避を知らぬのである。

有罪の提議を前にして「眞実を語る者」は語を次いで言う。「人間の最大幸福は、日毎に徳について語ることであつて、魂の探求なき生活は人間に価する生活ではない」と。自他人間吟味の仕事をやめ、沈黙して平和な余生を送ろうことは、彼にとっては絶対不可能である。それは神命に対する違反であるから。徳について語ることは魂の探求　人間の吟味　生活の価値　教育の方法とその目的。しかして教育者は、常に自らの信の孤独において世界の不信と闘う者。「死」こそ彼に捧げられたる最後の教壇。およそ彼が受くべき最高にして最後の報酬。

「眞実」はついに「死」をもつて語られねばならぬ。ソクラテスは彼が為した、かかる弁明の仕方を悔いない。死を脱れる方法はいくらでもある。が、困難なのは死を脱れることではなくて、悪を脱がれることである。彼に死刑を宣告することによって、自らはかえつて眞理から賤劣と不正との罪を宣告されたアテナイの市民が「自らの

悪から脱がれる最も美しく、最も容易な方法は、出来る限り有徳になるよう自ら心がけることである！」と。今やまさに永遠の懐に帰えらんとする彼は、なお一段と声を励まして、この地上の闇と動乱とに心痛み思い悩むのである。我に叛き、迷い行こうとする子の後姿になお呼びかけずにはいられぬ親心。教育の殿堂はここに盤石の礎を築いて、燦として不壊の姿に輝く。これこそ自らの七十年の信の「生」を媒介として、ソクラテスが愛する祖国に対して贈る最後の「死」の対話ではないか、まこと「信即眞理」「眞理即祖国」に終始し、眞理の探究にまで、我、人駈ることがそのまま祖国への教育であったソクラテスにとっては、祖国の心のままに委ねられて来た自己の「生死」は、そのまま一つの「対話」である！

生死の人生（祖国）ある限り教育あり、教育の存する所対話法は生きて行く。無知の自覚者への神の使命の遂行は、ソクラテスの死をもって断絶せらるべきでないことは、皮肉にも（或は眞面目に）彼がアテナイ市民に託するに彼の遺児の教育をもつてしていることによつても知られる。すなわちソクラテスが祖国に為したごと

く、彼等市民は遺児に対して、かのソクラテス式吟味を
嚴重に適用して欲しいというのである。そして言う、「そ
の時こそ自分も自分の息子らも祖国の市民から正当な取
り扱いを受けたというべきである」と。ソクラテスは永
遠にこの課題の解答を我らに期待して静かにその毒盃を
置く。今　　私はペンを措くにあたって、自分が依
然としてソクラテスに毒盃を強いたアテナイ市民の一人
であることに、しみじみ気づかされるのである。そして
「ソクラテスおよびその息子らがまさしく正当なる取り
扱いを受けているかどうか？」という詰問に対しては、
唯々心の怖れおののくを覚えるほかはないのである。

昭和六年紀元節の夜　記

高知師範学校文芸部誌『白菱』創刊号に寄稿